

福祉フォーラム通信

No.30 発行日：2024年5月1日

2023年度福祉フォーラムでは、専門セミナーを2回開催しました。専門セミナーとは、社会福祉実践に関わる専門職やスタッフの方を対象とした講座です。福祉、保健、教育などの現場で直面する問題についての悩みや解決策を話し合いながら専門的スキル向上を目指しました。

ご報告

福祉フォーラム第27回専門セミナー 「孤立への伴走～居場所の今とこれから～」を開催しました。

日時 2023年12月16日(土) 13時30分～15時30分
場所 龍谷大学瀬田キャンパス 2号館1階 多機能教室
基調講演 テーマ「孤立・孤独と居場所」
山田 容 先生 (龍谷大学社会学部教授)
桐高 とよみ さん (特定非営利活動法人ぱんじー所長・福祉フォーラム委員)
シンポジウム テーマ「居場所の今とこれから」
森野 道代 さん (天津市社会福祉協議会地域福祉課長)
山崎 秀樹 さん (甲賀・湖南ひきこもり支援 奏一かなで一事務局長)
中島 円実 さん (つながり若者センター(滋賀県地域養護推進協議会)統括コーディネーター)

第27回専門セミナーは、「孤立への伴走～居場所の今とこれから～」と題して、2023年12月16日(土)に25名のご参加をいただき、開催されました。

テーマである孤立は、大きな社会問題となっており、国も担当大臣を置き、関連法も整備されるなど国家的な課題となっています。このセミナーでは、孤立対策として近年重視されている「居場所」に焦点を置いて、若者、ケアリーバーを対象とする「つながり若者センター」の中島円実さん、引きこもり・障害者を対象とする「奏」の山崎秀樹さん、地域で総合的に孤立・孤独支援を行っている「天津市社協」の森野道代さんからそれぞれの実践を紹介いただき、居場所に求められること、地域における孤立への支えについて考える時間を持ちました。

それぞれのお話は、事例を交えるなど具体的で、なにより人とのつながりの構築を大事にしようとする支援者の思いが伝わる内容でした。また支援者と要支援者という枠を超えて、ともに状況を共有し、楽しさや参加を大事にされている実践の紹介も刺激になり、実践での大きなヒントとなりました。

参加者の感想からも、「引きこもりの人は支援を受ける印象が強くなってしまいが、自分も何か出来るということがその人にとっての居場所となる上で必要だということ学びました。」「人と必要とされることを必要とするということがはっきりと理解できました。」「「居場所」をつくるということの複雑さ、受けるだけではなく与える役割があるという重要性に気づくことができた」など当事者を能動的な主体として位置づけることの意義が指摘されていました。

今回は、学生の参加も多く、自身の実習の経験、今後の研究や進路と重ね合わせながら熱心に参加している姿も印象的でした。

会の終了後、「アフタートーク」として登壇者、参加者が交流する時間を持ちましたが、多くが残ってくださり、報告された内容への意見や質問、それぞれの実践についての情報交換など、なごやかな雰囲気でも多くの思いが交わされました。

これからも「ひとり」が促進される価値や仕組みは強固になると考えられます。同時に他者からの承認や一人では対処できない困り事もまた増えていくのだと思われます。そのような時代の中で、人とつながり支えること、そして主体としての尊厳と役割を保ち続けることの意義について学ぶ機会となりました。



福祉フォーラム第28回専門セミナー

「『子ども期の逆境体験 (ACE)』をもつ若者をどう支援するか？～当事者と研究者の視点を交差する～」を開催しました。

日時 2024年1月21日(日) 13時30分～16時30分

場所 龍谷大学 瀬田キャンパス 6号館 プレゼンテーション室

基調講演 (研究者の視点から)

三谷 はるよ さん (龍谷大学 社会学部 准教授, 『ACE サバイバー』 (ちくま新書, 2023年) 著者)

実践報告 (ACE サバイバー当事者の視点から)

平井 登威 さん (NPO 法人 CoCoTELI 代表理事)

ほほこ (道子) さん (元エホバの証人 二世当事者)

ワークショップ テーマ「子ども期の逆境体験をもつ若者をどう支援するか？」

ファシリテーター 川中 大輔 先生 (龍谷大学 社会学部 准教授, こども家庭庁 こども家庭審議会 専門委員)

子ども時代に虐待やネグレクト, 家族の精神疾患や依存症, 近親者間暴力などに曝される「子ども期の逆境体験」をACE (Adverse Childhood Experience) と言います。今回のセミナーでは『ACEサバイバー』 (ちくま新書, 2023年) の著者である三谷はるよ先生の基調講演からスタートしました。

講演の中ではまず, 国内外の実証研究の成果として, ACEの過去を抱えながら生きている人びとは, 健康問題や社会経済的問題のリスクが高くなったり, 複雑なトラウマが引き起こされやすくなっていることが示されました。ここで重要なことは, ACEは個人の問題ではなく社会の問題であるということ, そして, 生育環境の格差が生涯にわたる多面的な格差につながる可能性が高いということです。

それでは, どのような社会環境を整えることが, 格差の解消/緩和につながるのでしょうか。三谷先生からは, 18歳になるまでに子どもの帰属意識や良好な人間関係を構築できるポジティブな体験をさす「子ども期の良い体験 (PCEs: Positive Childhood Experiences)」を増やしていくことが重要であることが指摘されました。その上で, 現在, 逆境に曝されている子どもたちと, かつて曝されていた大人たちを無視しない社会となるために, ①支援者養成の場でACE・TIC教育を, ②小中学校で性教育・人権教育を, ③児童虐待対応システムの改善を, ④妊娠期からの「伴走型支援」を, という4つの具体的な提言がなされました。

基調講演に続く実践報告では, 精神障害の親のもとで育つ若者の支援に取り組んでいる平井登威さんと, 宗教二世の問題に直面している人々の支援に関わっているほほこ (道子) さんから当事者の視点/経験からの活動が紹介されました。この実践報告と基調講演からの気づきを踏まえて, 「子ども期の逆境体験をもつ若者をどう支援するか？」というテーマでの意見交換が参加者間でなされて, 本セミナーを終えることとなりました。

本セミナーには31名の方々にご参加いただき, 「研究成果とともに当事者からの話を伺うことができ深い理解と考察の機会を得ることができました」

「希望と絶望とが入り混じるようなどうしようもない難しさを感じました。だからこそ多くの子どもが違和感なくアクセスできる学校や本人の潜在的なニーズまで想像しながらアウトリーチ的に関わってくれる支援者の存在の大きさも強く感じました」「私の今後の業務に生かせる話が多くあり, 有難かったです」といった感想が寄せられました。

それぞれの暮らしと働きの中で, ACEサバイバーを支えたり, PCEsを増やしていったりする実践を展開していく一助となったのであればと願うばかりです。改めて, ご登壇/ご参加いただいた皆さまに深く御礼申しあげます。

